

国語

(解答番号 ① ～ ③2)

一 次の【文章Ⅰ】は、作田啓一『価値の社会学』の一節である。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。解答番号は ① ～ ①7。

【文章Ⅰ】

ア 日本の家族において親の権威が強かったという場合、この権威はじつは本当の強さをもっているとはいなかった、と筆者は考える。権威は権力とは異なって、その統制に服する側の者に、統制が正当であることを認める承認の態度がなければならない。この態度が強ければ強いほど、権威の強さは増してくる。ところで、一般に集団のリーダーの統制が十分に承認されるためには、彼が集団の外側からくる圧力に対して、集団のメンバーを保護しうる力をもっていなければならない。リーダーのこのような保護能力は、権威の唯一の要件ではないが、重要な要件の一つである。リーダーが外界に対して依存적である場合には、集団内での彼の権威は弱くなる。ことに、外部からの要求にひきずられて、彼の集団内での統制の仕方が動揺する、というようなことであれば、彼の権威はいっそう低下するであろう。もちろん、権威の構成要件は多様である。家族のリーダーである家長の場合を考えてみるなら、一家をフヨウする能力^A、愛情や人格的な魅力、一般的な教養、時に応じて的確な判断など、数多くあるだろう。しかし、家長はつねに家族の代表者としての役割を演じることを、社会からも家族からも期待されており、この代表者の役割に関して自立性を欠く場合には、家族の中での家長の権威はかなり低下する。

イ ところで日本の家族は、西欧の家族や中国の家族に比べると、伝統的に自立性が弱かったのではないか、というのが筆者の推測である。かつて別のところで引用したことがあるけれども、ベネディクトはこの点について重要な指摘を行なった。「大家族制、もしくはその他の部分的集団が活動している社会では、ある集団の成員の一人が、他の集団の成員から非難や攻撃を受けた場合には、その集団は一致団結して保護に当るのが常である。……ところが日本では丁度その逆になっているように思われる。すなわち、自己の集団の支持を得ることが出来るという確信を持ち得るのは、他の集団からは認が与えられている間に限られるのであって、もし外部の人々が不可とし、非難したならば、当人が他の集団にその非難を撤回させることができるまでは、……彼の属する集団は彼に背を向け、彼にチョウバツを加える。こういう仕組みになっているために『外界の是認』ということが、恐らく他のいかなる社会においても比類を見ないほどの重要性を帯びている」。これはたいへん重要な指摘であるように思われる。彼女は、家族を含めて一般に日本の集団が、外界に対して抵抗力が弱く、内部の成員を外界の脅威から保

護する能力を欠いている、と考えた。

日本の家族は農業家族をとって考えてみると、村落の中での自立性はきわめて弱かった。日本の農村ではとくに共同体規制が発達し、各家族が分担すべき仕事は、この規制によって嚴重に定められていた。経営の単位はもちろん一個の農家であつたけれども、水や山林の共同利用に、各農家の経営と生活が大きくよいかつていたので、村の中での世論に、家族はきわめて敏感にならざるをえなかった。村の世論によつて是認されない行動をした人間が現われると、彼の家族は彼を世論の圧力から保護してやるだけの力をもたなかった。家族はむしろ「世間」の側に立ち、彼に反省を求めた。そこでたとえば村のしきたりと同調することができなかったむすこにとつては、彼の父＝家長は、世間の圧力の流れを彼に向かつて流し込むパイプの役割を果たしたのである。彼の家族は村落の中での独立の単位ではなく、したがつて家族を代表する家長は、外に對して自立性の弱い存在であつた。もちろん、両親、とくに母親は、しばしば心情の面ではむすこの味方であつたことは確かだろう。しかし、心情の面での同情は、世間に背くむすこを世間から保護する力のたしにはあまりならない。そこで、両親はむすこに同情しながらも、むすこにカ^Cイシン^Dを求めるという矛盾をおかすのである。こうした親の行動にみられる一貫性のケツジ^Dヨに対応して、当然むすこの側においては親の權威が低下する。親の同情は、權威の低下を防止するどころか、その非一貫性のゆえに、かえつて低下を促進することさえ考えられるのである。他方、後期封建社会の武家家族の場合はどうであつたか。このサラリーマン家族にとつては、職業集団である武家仲間の世論、とくに上位者のあいだの世論が、たいへん大きな意味をもつていた。親たちはそれらの世論にきわめて敏感であつた。平和な時代にあつては、「家」の存続と繁栄は、ほとんど家族に對する世間の評判によつて左右されるからである。しかし武家の職業集団と家族との関係は、社会学の研究が薄い部分なので、ここではこれ以上立ち入ることができない。推測にすぎないが、俸給生活者である武家の家長は、ともかくも自営の農家の家長よりも、家族を保護する力が弱かつたのではなからうか。そのかわり、武家家族においては、儒教倫理による家長の權威のテコ入れが行なわれた。そのことで權威はたしかに強化されたに違いないが、そのテコ入れを必要としたということが、武家家族の自立性の弱さにもとづく家長の權威の弱さを、逆に物語っているともいえるのである。

明治以降になつて、日本の家族の自立性を強める条件が、とくに新しく現われたとは考えられない。むしろ国家權力が強くなつたので、この權力が家族を含む第一次集団の末端にまで及ぶようになった。国家權力の圧力は地域社会^{コミュニティ}の世論の圧力ほど、生活の隅ずみにまでは及ばないが、しかしやはり家族の自立性を脅かす強敵である。国家權力が家族の自立性を直接テストする場合はまれであるが、治安維持法によつて学生や若い労働者が検挙された時、家族^エは自立性^エに關して一つの試練に直面した。多くの若者は家族のことを考えて轉向した。その意味はさ

まざまに解釈することができようが、一つにはやはり、この若者たちのような非同調者を世間に送り出した家族が世間の中で意識する肩身の狭さに、若者たちが耐え切れなかったためである。親たちが若者に同情すればするほど、逆に若者は親たちの世間の中のヒゲ^Eの意識を尊重しなければならぬ義務を感じたことであろう。もし、親たちが子どもの非同調的な活動により、世間の中で誇りを感じないまでも、少なくとも世間に対して無関心な姿勢程度のものを持ち続けていることができたなら、転向の動機として家族への配慮があげられる割合は、もっと少なくなっていたかもしれない。転向者が少なかったであろう、というのではない。裸の暴力に抗して信念を守るためには、特別の資質が必要である。ただ、転向の動機として、家族に言及されることもっと少なかったであろう。そして、もしかすると、転向そのものもいくらかは少なかったかもしれない。日本の家族は、近代社会にはいつてから、自立性を強めるよりもむしろ弱めてきた。

ヨーロッパの家族は、農業家族の段階から日本の場合よりも強い自立性をもっていたように思われる。農家は相対的に広い地域に散在しており、昔から自衛のための武器さえもっていた。それに、水を利用しない生産様式は、日本の場合のようなこまかい共同体規制を生み出さなかった。十九世紀のブルジョア家族もまた、コミュニティから比較的独立していた。たとえば、子どもの教育に関しても私教育が盛んであり、明治以降の日本の家族の場合のように、公教育に子どもをゆだねることで、コミュニティと強く結びつくようなことはなかった。革命以前の中国の家族は、より大きい集団に強く依存していた。だがこの集団は氏族であり、家族の延長にすぎなかったから、日本の家族の村落への依存とは性質が違っている。中国の氏族は拡大された家族であり、したがってこの大きい集団に家族が包摂されていたとしても、そのことが家族の自立性の弱さとして、家族成員に受け取られはしなかったであろう。そして氏族はきわめて自立性の強い集団であり、氏族の成員のあらゆる生活要求を満たしうるほど自足的であった。氏族は自然や国家権力の脅威から自己の成員を護り、どこかの家族が被害や災害を受ければ、氏族全体がその家族を助けた。日本の同族は中国の氏族と似たところをもっている。しかし同族は純粹な血縁集団ではなく、しばしば無力な家族が庇護^{ひご}を求めて参加する保険の組織に似たところがあったから、中国の氏族ほど強い精神的な統一性をもっていない。そのかぎりにおいて、外部に対しての自立性も相対的に弱かった。

これらの比較は、もちろんきわめて不十分なものである。だが、日本の家族はふつう考えられているほど自立性をもたなかったということは、以上述べたところによって、いくらか明らかにになったと思う。その自立性の弱さと裏表の関係にある親の権威の弱さが、自律的、主体的人間を大量に形成することに、日本の家族が不向きであった第一の理由である。強い権威のない親が、子どものパーソナリティの中に強い超自我をつくり上げることがむずかしい。第二に、

日本の家族が戦後にいたるまで、親子関係が中心の家父長家族を典型としていたことも、主体性の弱い人間を形成した原因である。そこでは西欧近代の場合のように夫婦関係が中心でないから、世代間の非連続観が育ちにくかった。そのために、世界一般から自己が切り離されているという鋭い自己意識が形成されにくい。第三に、指摘の必要もないほど自明の事柄であるが、超越神をもつキリスト教に相当するような宗教が、日本には不在であったことも、自律的人間の形成をはばむ付随的な条件である。

それでは、家族の擬制的な延長である親分―子分的な組織は、どの程度自立性を保ってきたか。筆者はその点についても、従来までこのタイプの組織の閉鎖性が強調され過ぎた、と思っている。先に触れたように、家族主義集団の典型とみなされている同族にしても、中国の氏族に比べれば、自己完結性は弱い。国家と家族との中間には、さまざまな中間集団があるが、一般に日本の中間集団は、外界の圧力に対してそのメンバーを保護する力を充分にもってはいない。

(本文中に一部省略・改変したところがある)

(注) *ベネディクト——ルース・ベネディクト(1887～1948)。アメリカの文化人類学者。

問1 二重傍線部A～Eに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それ

ぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は ① ～ ⑤。

A フヨウ ①

- ① 気分がコウヨウする。
- ② 新人候補をヨウリツする。
- ③ 事件のガイヨウを説明する。
- ④ 退院後、自宅でセイヨウする。
- ⑤ ボンヨウな成績に終始する。

B チョウバツ ②

- ① 犯人の顔のトクチョウを教える。
- ② 新しいことにチョウセンする。
- ③ カンゼンチョウウアクの時代劇。
- ④ キンチョウで硬くなる。
- ⑤ 失敗しないようにジチョウする。

C カイシン ③

- ① 契約コウカイの話し合いに臨む。
- ② 依頼をカイダクする。
- ③ 熱中症ケイカイアラートが発表された。
- ④ 幼少時代のカイコ録。
- ⑤ 店舗に在庫の有無をショウウカイする。

D ケツジョ ④

- ① インフレをジョチョウする政策だ。
- ② トツジョとして現れた救世主。
- ③ その物語にはジョショウから引き込まれた。
- ④ コモンジョを解読する。
- ⑤ 春のジョクンの発表が行われた。

E ヒゲ ⑤

- ① ヒガの違いが際立つ結果となる。
- ② この洞窟は天然のヒムロだ。
- ③ ロウヒを繰り返すのは愚かだ。
- ④ その研究はヒトク性が高い。
- ⑤ ヒキな例を挙げて説明する。

問2 傍線部ア「日本の家族において親の権威が強かったという場合、この権威はじつは本当の強さをもってはいなかった」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑥。

① リーダーはつねに集団の代表者としての役割を演じることを期待されているが、日本の家族においては、家長たる父親に家族の代表者という意識は薄かったということ。

② 権威の強さには、統制に服する側の者からの統制が正当であることを認める承認の態度が影響するが、日本の家族における親の権威は承認とは無関係だったということ。

③ 日本の家族は家長が絶対的な権威をもつて家族を統制する家父長制に基づく家族形態で、家長の権威は家族の信頼の上に与えられたものではなかったということ。

④ 家長は家族のリーダーとしての役割をもつ人物だが、日本の家族は伝統的に自立性が弱かったため、家族の代表者である親に対しても自立性を欠いていたということ。

⑤ リーダーに保護能力がなければ集団内での彼の権威は弱くなるが、日本における家長は外界に対する抵抗力が弱く保護能力を欠いたため、権威は強くなかったということ。

問3 傍線部イ「日本の家族は、西欧の家族や中国の家族に比べると、伝統的に自立性が弱かった」とあるが、日本の家族の自立性が弱くなった理由を筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑦。

① 日本の社会はコミュニティに対する依存度が高く、子どもの教育に関しても西欧と異なってコミュニティ内での教育にゆだねるため、子どもの自立性が育たなかったから。

② 西欧や中国の家族は、家族の一人が他の集団から非難や攻撃を受けると、一致団結して保護に当たるが、日本の場合は逆に外部の人に非難される人間に背を向けたから。

③ 日本の家族は村の中での世論にきわめて敏感で、たとえばむすこが世間に背いた場合、親はむすこに同情しながらも、世間を恐れてむすこの味方することはなかったから。

④ 日本の農村では共同体規制が発達し、水や山林の共同利用に生活がかかっていたため、西欧や中国の家族に比べて村落の中では認を得られることの重要度が高かったから。

⑤ 西欧や中国の集団は集団内の成員同士の結びつきが強固だったが、日本の集団は家族も含めて一般に、内部の成員を外界の脅威から保護する能力を欠いていたから。

問4 傍線部ウ「武家家族においては、儒教倫理による家長の權威のテコ入れが行なわれた」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 8。

①「家」の存続と繁栄が重要であった武家家族にとって、上位者からのよい評判を得ることが重要だったため、儒教を学んで人間関係の維持に努めたということ。

② 封建社会の武家においては、主君と家臣の主従関係を優先することが求められたので、忠義を徹底させるために儒教の倫理観を浸透させようとしたということ。

③ 自営の農家以上に仲間の世論が大きな意味をもつ俸給生活者である武家家族に儒教の教えを及ぼして、家族を守る力の弱かった家長の權威を強化したということ。

④ 親の權威が低下し「家」に対する世間の評判を落とすことは、上位者にとっても望ましいことではないため、家名の存続を図るために儒教を利用したということ。

⑤ 武家家族の家長は家族を保護できず、「家」における權威が弱くなっていたため、儒教倫理の教育を施すことによって、武家家族の自立性を強めようとしたということ。

問5 傍線部エ「家族は自立性に関して一つの試練に直面した」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 9。

① 反政府的な活動に参加しているとみなされ、国家権力の圧力を目の当たりにした家族は、非同調的な活動を行う若者を世間から保護することはしなかったということ。

② 若者が検挙されたとき、家族は若者の思いを考えず世間への肩身の狭さを感じ、若者は家族を思っただけ信念を翻すという、自立性に由来する葛藤があったということ。

③ それまでは、世間といえば地縁・血縁などの身近な人間関係であったが、明治以降、国家権力が強くなり、国家権力の圧力が世間を代表するものとなったということ。

④ もともと外に対する自立性が弱い日本の家族は、明治期に西洋の考え方が入ってきてからも西洋にならうことなく、むしろいつそう自立性が弱まったということ。

⑤ 非同調的な活動を行う若者も、超自我が育っていないために国家権力に反抗して信念を貫き通すことはできず、家族に配慮して転向する者が多かったということ。

問6 次の【文章Ⅱ】は、【文章Ⅰ】の少し後に続く部分である。【文章Ⅰ】を踏まえて、後の

(1)～(3)の問いに答えなさい。解答番号は ⑩ ～ ⑫。

【文章Ⅱ】

日本の社会では、家族も中間集団とともに W が弱く、そしてこれらの集団が、つねにより上位の集団に向かって開かれていいる（横にはまったく開かれていない、というのではないが）、というのが、これまでの結論であった。このような社会構造は、親子関係によって培われた日本人の X に明らかに適合する。そして、その X を補強する働きをもつといえよう。こうして、個人を中心とし、家族、中間集団、国家と広がってゆく Y 的構造が、日本人に一般的な社会構造の表象となるのである。古典的な中国の場合には、氏族と国家とのあいだに深い Z があった。それゆえ、国家を越えた世界的秩序を支配する理法としての「道」が、現実の国家の政治の依拠すべき原理であると思なされていた。君子たろうとする者は、まず「道」に従わなければならないかった。日本人は、儒教の「道」に相当する超越的原理への関心が弱い。それは国家のレベルにまで、集団が連統的に、Y 的に拡大してゆくからである。だが逆にまた、原理への関心の弱さが、諸集団間の裂け目、あるいは Z を十分に意識することを妨げる因子ともなった。

(1) 空欄 W に当てはまる語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑩。

- | | |
|---------|-------|
| ① 自己完結性 | ② 自立性 |
| ③ 統一性 | ④ 一貫性 |
| ⑤ 主体性 | |

(2) それぞれ二か所ずつの空欄 X・Z に当てはまる語句の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑪。

- | | |
|----------|--------|
| ① X 家父長制 | Z 関係性 |
| ② X 精神性 | Z 連帯感 |
| ③ X 連統観 | Z 非連統 |
| ④ X 無常観 | Z 断絶 |
| ⑤ X 連関 | Z 信頼関係 |

(3) 二か所の空欄 Y には同じ語句が入る。この部分に当てはまる表現として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑫。

① 弁証法

② 円環

③ 半永久

④ 敷衍 ふえん

⑤ 同心円

問7

次の(1)～(5)について、【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】の内容に合致するものとして、適当なものには①を、適当でないものには②を、それぞれ選びなさい。解答番号は ⑬。

⑬。

(1) 革命以前の中国において、中国の家族が強く依存していた氏族は拡大された家族であり、日本の家族が依存する世間と同じような存在だった。 ⑭

(2) 西洋や中国の家族に比べて外に対する自立性が弱く、そのために親の権威が弱い日本では、家族の中で子どもの主体性や自我を育むことはむずかしかった。 ⑮

(3) 近代西洋の家族では、親子より夫婦関係が中心であり、私教育が盛んで公教育に子どもをゆだねることがなかったため、コミュニティと強く結びつくことはなかった。 ⑯

(4) 日本において、国家と家族との間には同族や親分—子分的な組織などさまざまな中間集団があるが、外界に対する自立性の強弱はそれぞれに異なっている。 ⑰

(5) 日本の家族は親子関係を中心とした家父長家族であり、共同体とも強く結びついており、世間への依存が強いため、自主独立の精神の養成はむずかしかった。 ⑱

次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】は、いずれも角田光代『タラント』の一節である。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。解答番号は ⑮ ⑶。

二〇〇〇年二月、多田^{ただ}みのりは、大学で入ったボランティアサークル「麦の会」のスタディツアーでネパールへ行った。カトマンズ郊外の小学校を訪れ支援物資を渡した翌日、一行は孤児院を訪れた。

【文章Ⅰ】

ここでも小学校と同じように、大人たちの挨拶があり、それから子どもたちの歌や踊りがはじまる。よちよち歩きをしている子もいれば、みのりたちにじっと視線を注いだままの子もいる。小学校の子どもたちよりはおとなしくて静かだが、目が合うとやっぱり恥ずかしそうにうつむいて笑う。ひとり、笑わない女の子がいることにみのりは気づいた。

女の子たちの合唱があったのだが、彼女はちいさく口を開いているが歌ってはおらず、無表情だ。歌が終わり、もとの位置に戻っても、横座りした自分の足元をじっと見ていて顔を上げない。ほかの子どもたちの歌にもダンスにも目を向けない。最後に、子どもたち全員が立ち上がって歌を歌ったのだが、このときも彼女は歌わず、うつむいていた。

支援物資をひとりずつに渡すとき、受け取りにきたその女の子をみのりはのぞきこみ、ひよっと顔を作ってみせた。けれども彼女は顔を隠すようにして、みのりから支援物資の入ったバッグを受け取ると、逃げるように教室の隅にいった。

食堂で子どもたちといっしょに昼食をとるときも、昼休みに中庭で遊ぶときも、みのり^アはその女の子を目で追った。五、六歳くらいだろうか。髪をうしろでひとつに結び、無地のTシャツに黄色いズボンをはいている。表情のない顔でずっとうつむいている。いつものことで、みんな慣れっこなのだろう、ほかの子どもたちもその子には声を掛けない。

中庭では、大勢の子どもたちがみのりたち学生にまわりついて、じゃんけんに似た指の遊びをやらせたり、「だるまさんがころんだ」に似た遊びをはじめたり、サッカーやバドミントンに興^Aじて走りまわったりしている。みのりにもちいさな子どもたちがくつついてきて、つないだ手を離さず、体を押しつけてくる。大きなカメラを持っている^{*しょうた}翔太の前には、写真を撮ってほしい子どもたちの列ができている。笑わない女の子は木陰に座ってうつむき、自分の足元を見たままだ。何人かの学生が彼女に気づいて声を掛けるが、彼女は顔を上げない。

子どもたちが離れた隙に、みのりは彼女に近づいた。タバインコナムケホ？ 名前はなあに、と教わった言葉で訊^きいてみるが、やっぱり顔を上げない。親指と中指、薬指をくつつけて、「コンコンコン」と言ってみて、ネパールに狐^{きつね}はいないかもしれないと思いつき、両手の指で

犬を作って「ワンワンワン」と言いなোস。女の子はちらりと顔を上げるが、すぐうつむいてしまう。影ができないとなんの動物かわからないのだと思い、近くに落ちていた枝を拾い、うつむいたその子の視界に入るよう、地面にアニメキャラクターの絵を描いてみる。

「知ってる？　これ」^a日本語で訊くが、無反応。その隣に犬の絵を描いてみる。「ワンワン！　ワンコだよ」無反応。子どもたちが近づいてきてみのりの肩を叩き、首を振る。みのりはそれにかまわず今度は猫の絵を描く。「ニャーオニャーオ」女の子の顔をのぞきこむようにして鳴いてみせると、彼女は顔をゆがませ、そして声もなく泣きはじめた。

「えっ、ごめん」みのりはあわててあやまる。「ごめん、こわかった？　ごめんね」

ほかの子どもたちがみのりを立たせ、両手を引っ張る。泣いている子を振り返りながら、みのりは子どもたちに引っ張られていく。

「いろんな事情の子がいるから」

夜のミーティングで、例の女の子のことを話すと、敏子^{*としこ}はそれを現地スタッフに伝えてからそう言った。現地スタッフが英語で敏子に何か言い、

「あの子は三か月前にきたばかりみたい。人身売買された先で保護されたんですって」敏子がそれを訳す。「施設では心のケアもしているから、今日明日では無理でも、今度また会えるときはきつと笑ってると思うよ。ほかに何か、気づいたことでもやりたいことでも、ある人は手をあげて発言してください。なければ、明日のスケジュールを説明します」

人身売買されたということは実の親に売られたということか。心のケアがあるといっても、そんな体験がいつか癒えることがあるのだろうか。耳にしたことはあっても、身近に聞いたことのない人身売買という言葉に衝撃を受けて、みのりはめまぐるしく考える。考えても、しかし何かきちんとした考えが浮かぶわけでもない。帰るまでにあの子を笑わせることは無理なのかと暗い気持ちになるだけだ。

スタディツアーの最終日、一行は孤児院で昼食を作り、みんなで食べることになっていた。

【文章Ⅱ】

清掃班が用意した机に作った料理を並べていると、授業を終えた子どもたちが走り出してくる。手渡された紙皿と自分のコップを持って整列し、みのりたちは彼らに料理を取り分ける。

市子^{*いちこ}は子どもたちの名前をほとんど全員そらんじていて、^B商店で調達してきた缶ジュースを渡すとき、きちんと子どもたちの名前を呼んでいる。初日に聞き出した名前と特徴をメモして

覚えたのだと言っていた。しかも市子はいくつかのネパール語も覚えたらしく、子どもたちと
かんたんなやりとりもしている。その様子にみのりは気を取られて、よそついていた味噌汁みそしるがコ
ップからずれて、手にかかる。

「あっぢい！」みのりが思わず叫ぶと並んでいた子どもたちが大笑いする。「あっぢい！」とま
ねする声まであがる。「うるさいなあ」みのりも笑いながら顔を上げると、少しうしろで笑わ
ない女の子が顔を背けている。背けたその顔にちいさな笑みが広がっているのを見て、うわ、
とみのりは心のなかで叫ぶ。^㉔うわ、笑ってる！ こんなことで？ こんなことでいいの？ こ
んなことで笑う？

コップに味噌汁を入れて並んでいた子に渡し、次の子からコップを受け取り、古典的かと思
いつつも、「あっぢい！」手にこぼしたふりをして飛び上がってみせる。子どもたちは奇声を
あげ、飛び上がって笑う。女の子も顔を背けて口もとをゆがませている。

みのりは無性にうれしくて、味噌汁をコップにそそぐたびに、あっぢい！ と顔をしかめて
飛び上がり続けた。女の子の番がきて、うつむいたまま渡すコップを受け取ったみのりは、
「ぐわっ、あちいっ！」大げさに顔をしかめ、ひときわオーバークションで飛び上がる。

「多田、ふざけてないでちゃんとしろ！」^{＊さわ}焼きそばを配っている澤が怒鳴り、みのりは思わ
ず肩をすくめて頭を下げる。ちらりと女の子を見ると、うつむいたまま、たしかに笑っている。
食事の片づけを終え、院長と現地スタッフの挨拶があり、ずらりと並んだ子どもたちひとり
ひとりと握手して中庭を出る。笑わない女の子はずっとうつむいて、学生たちが手を握ってい
くのにかかっている。彼女の前にきたみのりはかみこみ、指で狐を作って「タ、パ、イ、ン、
コ、ナ、ム、ケ、ホ？」と狐の口をばくばくさせて訊いてみた。彼女は顔を上げなかったが、
サジナ、とささやく声が返ってきた。「サジナ、またね」みのりは彼女の肩を叩いて、握手を
する。握られるままのちいさな手はあたたかく、爪の先に土が入って汚れている。その手をみ
のりは両手で強く握った。

小学校の子どもたちと同じように、みんな外に走り出てきてバスを追いかけ手を振っている。
みのりたちも窓から身を乗り出して手を振り続ける。土埃つちぼこりの向こう、走る子どもたちのずっ
とうしろに、上目遣いCにバスを見ているサジナが見えた。

スタディツアーのち、みのりはサークル活動にのめりこんだ。はじめての海外旅行が強烈
に印象に残っていた。村の人たちとの交流や、よく笑う子どもたちと距離を縮めていく感覚、
どんなにちっぽけでも、何かしら人の役にたてた実感が忘れられなかった。ご褒美のようにつ
いていた短い観光時間でまわった、ダルバール広場やクマリの館、ボダナート仏塔や対岸から
見たパシュパティナート寺院や火葬場に、圧倒されたり驚いたりしたけれど、帰国して日がた
つにつれ、色濃く思い出されるのは観光地ではなく、なんにもない村と子どもたちだった。

「麦の会」では、ネパール、カンボジア、ラオスと、政情や治安なども踏まえた上で、毎年
の春休み、異なる支援国を訪れるのが恒例となっている。みのりもそれは知っていたが、めず
らしく年度末のミーティングで手を挙げて、選択制にできないかと鼻息荒く提案した。毎年一
か国ではなく、支援国のすべてにいきいたい人がいくのはどうか。単純に、みのりはまたネパ
ルにいきたいのだった。学校がどのくらいできているか、仲よくなった子たちは元気か、そし
てサジナはちゃんと笑っているか、再来年や三年後までとても待てないと思ったのだ。とうぜ
んながらみのりの提案は却下されたが、

「個人でもいけるボランティアツアーもあるし、このあいだ引率してくれた津田山^{つだやま}さんの団
体でも、定期的にネパールにいつているから個人的にお願いすれば連れていつてもらえるよ」
と澤が教えてくれた。

ツアー中、撮影係のようにずっと写真を撮っていた翔太が、自身の通う大学の共用施設の一
室を借り、スライドショーを開いた。スタディツアーに参加した面々と、参加しなかったが興
味を持つサークルメンバーが集まった。翔太は部屋を暗くし、スクリーンに見立てた白い壁に
パソコンを使って写真を映していく。みんな、パイプ椅子に腰掛けたり、床に座ったり、好き
好きにくつろいでそれを見た。

一眼レフで撮られた写真は、たしかにみのりが記念に撮った写真とは違って、格段に色鮮や
かでうつくしかった。

山羊^{やぎ}の群れ、寝そべる犬、遠く連なる稜^{りょうせん}線、青いシャツの子どもたち。「あ、ナラン」「こ
の子、歌うまかったよね」「スリジャナ先生〜！好きだー」「このダルバート、まじうまかつ
たな」「宿のトイレが手動水洗でさあ」だんだん声上がり、笑いが広がる。孤児院の写真に移
る。笑顔、おどける顔、肩を組む子どもたち、彼らと話す、サークルの面々。指で狐を作り、
座るサジナをのぞきこむみのりを、翔太は写真に収めていた。壁^かに大きく映し出される自分の
写真をみのりは意外な思いで眺める。

昨年、一九九九年末に翔太と玲^{れい}と戦場カメラマンの映画を見たあと、居酒屋で朝まで盛り上
がって話をした。戦渦のベトナムが舞台の映画だったので、報道写真についての話にもなった。
「もし目の前に血を流して倒れている人がいたら、助けるか、写真を撮るか」というようなこ
とを、玲が言い出したのだ。というのも、映画には実際の戦場カメラマンたちが撮ったベトナ
ム戦争の写真が多く挿入されていて、ショッキングなものも多かった。人が撃ち合い、倒れて
いくなかで、彼らに接近してシャッターを押し続けるカメラマンたちの姿にみのりは衝撃を受
け、これが戦場カメラマンなのかとこわごわ思ったのだが、ジャーナリスト希望の玲も、何か
思うところがあつたのだろう。

おれは写真を撮る、と翔太は言った。私は助けるか、助けを呼びたいと玲は言った。そして

二人はビールをおかわりし、唐揚げやポテトフライを食べながら議論をはじめた。写真撮ることでも多くの人に人が殺されていく現状を知ってもらい、全体を助けたいと思うから写真を撮ると翔太は言い、でもそれは目の前のひとりを見殺しにすることじゃないかと玲は言った。通信社に買い取ってもらう金額の高さと、写真の残酷さが比例するのは、頭ではわかるけれど私はいやだと思うと玲が言い、それが報道カメラマンの仕事だ、売らなきゃお金にならないし、取材も続けられないと翔太が言う。じゃあ翔太は、ゴシップ写真が高く売れるならそれを撮るわけ、と玲が訊き、それしか仕事があればそうする、そのお金で自分の撮りたいものを撮ると翔太が答える。

「翔太が言うのは結局『戦争』^エってかたまりだよ、そこで死んでいくひとりの人を無視してる。私はひとりを助けられるなら助けたいよ」と玲が言い、

「戦争っていう現実そのものを撮るのがカメラマンの仕事だろ？」と翔太が言う。

ヒートアップしていく二人の言い合いを聞きながら、みのりは、そんなふうに熱く話し合える二人をうらやましくも感じ、同時に、二人が何を話しているのかよくわからないと思ってもいた。今のところ、翔太は戦場カメラマンではないし、玲は戦場ジャーナリストではない。二人が言い合っているのは、自分がどうしたいのかではなくて、映画のなかの、死にゆく人を夢中で撮るカメラマンたちがたがだしいのかどうか、ということ、なぜそれを自分の確たる信念のように二人が話しているのかわからないのだった。

「みのりはどう思うのよ」玲が、意見を聞きたいというよりは、話に加わっていないみのりを気遣うように訊き、今考えたようなことを言いたいのにうまく言葉にできず、

「そもそも私は戦場にいきたくない」とみのりは言うが、

「なんだそれ」「そういうことじゃないじゃん」二人は呆れた^{あき}ように笑った。

そのやりとりを思い出すと、孤児院の庭の隅で、目立たないやりとりをしている自分たちの姿を翔太が写真におさめたことが、みのりには意外に思えるのだった。もっと派手なことにはばかり目がいく人だと思っていた。あのツアーでいえば、明かりのないぎゅうぎゅう詰めの教室とか、孤児院の乳幼児など、現状の困窮を強調した写真ばかりを撮るような人だと思っていた。「写真さ、いつもみんなで撮ったのからいいのを選んで、現像して子どもたちに送るんだけど、今年はぜんぶ翔太のがいいよ」スライドショーが終わると市子が言う。

「現像じゃなくてフォトブックみたいなの、安くできないかな？ 写真、すごくいいからさ」と澤。「この一年、働かずに写真ばかり撮ってた甲斐^E_{かい}あって、前よりうまくなったよな」「いやみですか、それ」と言いつつも翔太はうれしそうだ。

「今年の新歓チラシの写真も、翔太のでもいいよ」澤の卒業後、新しい代表となる神田寛美^{かんだひろみ}が言う。

「えー、おれ専属カメラマンってことですか」翔太は照れて笑っている。

スライドショーを見終わったみんなと居酒屋に向かって歩きながら、

「孤児院の、私の写真、ちょうだい」みのりは翔太に言った。

「あれ一枚だけでいいの」

みのりはうなずき、「翔太の写真は意外にやさしいね、もっとはげしい写真を撮るのかと思うってた」とつけ加える。

「あののんびりした村と、笑ってばかりの明るい子どもたちを、どんなふうにはげしく撮れつつうのよ」翔太は笑う。

写真に写る少女が笑ったとき、「私はひとりを助けない」と言った玲の言葉をみのりは理解した。隣を歩く翔太にそう伝えたい気がしたが、黙っていた。

笑ってばかりの明るい子どもたち。翔太の言葉をみのりは胸の内でもくり返す。ほかに刺激がないから笑う子どもたち。けっして笑わなかった子が笑った瞬間。^④同じ場所で、私たちはまったく違うものを見ていたんだなとみのりは思う。そして、一本の映画を見て、戦場で、銃弾に倒れているだれかを助けるか、写真を撮るか、それとも戦場になどいらないか、などと話していたあのときより、自分たちはずっと遠くに歩き出しているような気がした。^⑤

(注) *翔太——みのりの同期。

*敏子——津田山敏子。麦の会を引率している国際NGO団体の職員。

*市子——みのりを麦の会に誘ってくれた先輩。

*澤——麦の会の代表をしている先輩。

*玲——みのりの同期。

問1 二重傍線部A～Eの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤

のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 18 18 22。

A 興じて 18

① はしゃいで

② 夢中になって

③ おもしろがって

④ 羽を伸ばして

⑤ いやなことを忘れて

B そらんじて 19

① 間違えずに言えて

② 心に焼き付けて

③ メモして

④ 暗記して

⑤ 呼び慣れて

C 上目遣いに 20

① 顔をまっすぐ向けて

② 媚こびた視線で

③ 訴えるような眼めで

④ 目線だけを上げて

⑤ 顔をそらして

D 鼻息荒く 21

① 強気に

② 不満げに

③ 情熱的に

④ 一生懸命に

⑤ 意気込んで

E 甲斐あって 22

① 努力の成果が表れて

② 評価を得られて

③ 意図が正しくて

④ 期待通りの結果で

⑤ 苦勞の代償として

問2 傍線部ア「みのりはその女の子を目で追った」とあるが、なぜか。その理由の説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 23。

① みのりたちに興味を示す子どもたちが大勢いるなかで、ひとりだけ笑わない女の子がいることに違和感を覚えて、何か事情があるのだろうかと思いついたから。

② 笑わないだけでなく、表情のない顔でうつむいて誰とも遊ぼうとしない女の子が心配になり、何とか楽しませてあげようと話しかける機会をうかがっていたから。

③ 女の子が無表情でうつむいている様子や、ひょっとこ顔を作ってみせても顔を隠して逃げるようにした様子が気がかりで、幼い子が笑えないことに胸を痛めていたから。

④ 人なつこくよく笑う子どもたちのなかで、常にひとりで行動しているその女の子は周囲からかなり浮いていて、自分が手を差し伸べなければという使命感を持ったから。

⑤ 無邪気な年ごろの女の子が、他の子のように笑うことも遊ぶこともなく、その年齢にそぐわない無気力な様子であるのが痛ましく、どうしても目が離せなくなったから。

問3 傍線部イ「みのりは思わず肩をすくめて頭を下げる」とあるが、このときのみのりの様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 24。

① 「笑わない女の子」の笑顔を見られたうれしさのあまり、その行動を何度もくり返していたが、その気持ちを察してくれない澤に怒られたことにがっかりしている。

② 顔を見られないようにしながら笑みを浮かべている「笑わない女の子」がいじらしくて、つい調子に乗りすぎたと反省しつつも、悪いことをしたとまでは思っていない。

③ 「笑わない女の子」にもっと笑ってほしくて、大げさに叫んで飛び上がったいたら、ふざけすぎだと澤に叱られてしまったことが恥ずかしくて、身を縮めている。

④ 前回はまったく反応のなかった「笑わない女の子」が笑顔を向けてくれたことに舞い上がり、うれしさでいっぱいのときに水を差されたことが残念で、澤に憤慨している。

⑤ 思わず口からこぼれた「あつちい！」という叫びが「笑わない女の子」の笑顔を引き出したことに気を良くしていたが、澤の怒鳴り声で冷静になり、萎縮している。

問4 傍線部ウ「壁に大きく映し出される自分の写真をみのりは意外な思いで眺める」とあるが、みのりが「意外」と感じたのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選びなさい。解答番号は 25。

① 大きなカメラを持っていた翔太は、写真を撮ってもらうために並んで待っている子どもたちに囲まれていたため、自分が撮られていたことに気づかなかったから。

② 孤児院の写真は、サークルの面々と子どもたちの笑顔あふれるものばかりだったので、そんななかで笑っていないサジナをのぞきこむみのりの写真は異質だったから。

③ 以前の玲と翔太との会話から、翔太は厳しい現実や悲惨さを訴える写真を撮る人だと思っていたので、自分たちの地味な姿を撮っていたことが思いがけなかったから。

④ いつも派手な写真を撮っているジャーナリスト志望の翔太が、孤児院の庭の隅で目立たないやりとりをしている自分たちに気づいていたことに驚いたから。

⑤ ネパールの孤児院という被写体には現状の困窮を強調した写真の方がふさわしく、自分たちの一見ほえましい姿は、そのテーマにそぐわないと感じたから。

問5 傍線部エ「翔太が言うのは結局『戦争』ってかたまりだよ」とあるが、玲はどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選びなさい。解答番号は 26。

① 翔太の「全体を助けたいと思うから写真を撮る」という思いは、目の前で失われようとしている命を無視した非情な言い分であるということ。

② 翔太は写真を撮ることに意味があると考えているが、助かるかもしれない人の命と引き換えにするほどの価値はないということ。

③ 翔太は写真を撮ることで人々に現状を知らしめたいと言うが、それでは現在の戦争を止められず、その間にも人が死ぬということ。

④ 翔太の発言は、死にゆく人を夢中で撮るカメラマンたちがただしいという意見であり、自分がどうしたいのかを言ったものではないということ。

⑤ 翔太は「戦争」という言葉で抽象化される事象だけを見て、そこで実際に死んでいく具体的な人間の存在を想像できていないということ。

問6

【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】におけるみのりとサジナとの交流の様子を次のようにまとめた。

空欄 に当てはまる表現として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ

選びなさい。解答番号は 。

【文章Ⅰ】

●みのり

笑わない女の子に気づく

顔をのぞきこみ、おどけた表情を作る

指で狐や犬を作って話しかけてみる

顔をのぞきこむようにして、「ニャーオニャーオ」と鳴いてみせる

←
女の子の気を引き、反応を引き出そうと働きかけている

●サジナ（笑わない女の子）

・表情のない顔で、うつむいている

・ほかの子どもたちに目を向けない

顔を隠すようにして、支援物資を受け取ると、逃げるように教室の隅にいった

無反応

顔をゆがませ、声もなく泣きはじめた

←

【文章Ⅱ】

●みのり

味噌汁が手にかかり、「あっちい！」と思わず叫ぶと子どもたちが大笑いする

↓
次の子のときも手にこぼしたふりをする

↓
女の子の番がきて、大げさに叫んで飛び上がるが、澤に怒鳴られ、頭を下げる

↓
指で狐を作って名前を聞く

↓
サジナの手を両手で強く握った

←
サジナが笑ってくれ、名前を覚えてくれたことがうれしくてたまらない

●サジナ

少しくしろで、背けた顔にちいさな笑みが広がっている

↓
顔を背けて口もとをゆがませている

↓
うつむいたまま、たしかに笑っている

↓
サジナ、とささやく

↓
遠くからバスを見送っている

←
少しずつ、確実にみのりに心を開いている

- ① 人との交流を徹底的に避けて、みのりのしつこい干渉に対しても迷惑がっている
- ② 顔を人に見られることを嫌がり、喜怒哀楽を一切表情に表さないようにしている
- ③ 子どもらしさがまったくなく、自分ひとりの世界に閉じこもることを望んでいる
- ④ 実の親に売られた苦しみのために、何にも心を動かされることがなくなっている
- ⑤ 心を閉ざしてはいるが、みのりの働きかけで少し感情を表現できるようになっている

問7

次の(1)～(5)は、本文を読んだ高校生五人が表現の特徴や内容について発言したものである。本文に即して、適当なものには①を、適当でないものには②を、それぞれ選びなさい。解答番号は 28 ～ 32。

(1) 生徒A——波線部①「日本語で訊くが、無反応。」には、直後で再度「ワンワン！

ワンコだよ」無反応。」と重ねることで、何をしてもしサジナの心には響かないため、遂方に暮れるみのりの絶望感を、短い言葉で強調する効果があると思います。

28

(2) 生徒B——波線部②「今日明日では無理でも、今度また会えるときはきっと笑ってる

と思うよ。」は、サジナの置かれてきた過酷な境遇を強調するとともに、この後の展開で彼女が笑顔を見せることを暗示する伏線として機能していると思います。

29

(3) 生徒C——波線部③「うわ、笑ってる！ こんなことで？ こんなことでもいいの？」

は、サジナを笑わせることは無理なのかと暗い気持ちになっていたのに、意図しない行動で彼女の笑顔を引き出せたみのりの喜びを効果的に伝えています。

30

(4) 生徒D——波線部④「同じ場所で、私たちはまったく違うものを見ていたんだなとみ

のりは思う。」は、子どもたちの一面しか見ていなかった翔太と、サジナに気づいたみのりとの対比によって、それぞれの視点が異なることもあると実感・納得しているみのりの心情を表しています。

31

(5) 生徒E——波線部⑤「自分たちはずっと遠くに歩き出しているような気がした」は、

「私はひとりを助けた」という玲の言葉を理解したみのりと、一年前から写真技術以外は成長していない翔太との距離が開いたことを示すものだと思います。

32